

第17回「いつもありがとう」作文コンクール

言葉ではいえない家族への感謝の気持ちを作文に書いてみよう

■募集テーマ/いつもお世話になっている家族に対し、普段言葉ではなかなかいえない感謝の気持ちを作文に書いて応募してください。

例)「お母さんありがとう」「大好きなお父さんへ」「私のお兄ちゃん」など
 ■応募方法/400字詰め原稿用紙1~3枚まで。作品の裏に応募者の郵便番号・住所・氏名・電話番号・学校名(所在地・電話番号)・学年・年齢・当コンクールを知ったきっかけを明記してください。

◎応募作品は返却しません。◎ひとり何点応募しても結構です。◎作品は必ず自分で書いたもので、未発表のものに限ります。◎海外からも受け付けます。

■応募資格/全国の小学生

■応募締切/2023年9月8日(金)必着

■応募宛先/〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-10-4 寿ビルディング2F

「いつもありがとう」作文コンクール事務局

■お問い合わせ/電話03-3545-5226 受付時間10時~18時(土・日・祝日を除く)

■審査員(敬称略)



■入賞発表/2023年12月8日(金)朝日小学生新聞紙上・

「いつもありがとう」作文コンクール特設ウェブサイトで発表予定

- 賞
- 最優秀賞.....1作品 賞状・副賞として図書カード 5万円分
 - シナネン賞.....1作品 賞状・副賞として図書カード 3万円分
 - ミライフ賞.....1作品 賞状・副賞として図書カード 3万円分
 - 朝日小学生新聞賞.....1作品 賞状・副賞として図書カード 3万円分
 - 優秀賞.....低学年の部 3作品/高学年の部 3作品
 - 入選.....低学年の部 7作品/高学年の部 7作品
 - 団体賞.....賞状・副賞として図書カード 5万円分
- ※「北海道・東北」「関東・甲信越」「中部・関西」「中国・四国」「九州・沖縄」の5ブロックから選出

【「いつもありがとう」作文コンクール 特設ウェブサイト】
<https://sinanengroup.co.jp/sakubun/>



主催：シナネンホールディングスグループ/朝日学生新聞社

後援：文部科学省/朝日新聞社

※応募に関する注意事項/コンクールの審査結果に関わらず、応募作品に関する所有権、著作権等の権利は、主催者側に帰属するものとし、それらを広告宣伝等の目的でシナネンホールディングスグループ及び朝日学生新聞社の広告や印刷物、ホームページ等に使用させていただきます。※個人情報に関する注意事項/お客様からいただいた個人情報は、賞品等の発送、シナネンホールディングスグループ及び朝日学生新聞社の広告宣伝等のための広告や印刷物、ホームページ等への応募作品の掲載のためにのみ利用させていただきます。また、当該業務の委託に必要な範囲で委託先に提供する場合を除き、個人情報をお客様の承諾なく第三者に提供いたしません。

【シナネンホールディングスグループ】

シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ ミライフ東日本
 日高都市ガス シナネン シナネンサイクル シナネンモビリティPLUS
 シナネンエコワーク シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン
 インデス シナネンファシリティアーズ

人とエネルギー、住まいと暮らしのあいだに。



<https://sinanengroup.co.jp>

「お母さんの口ぐせ」

「早く早く」がお母さんの口ぐせだ。朝起きる時も学校に行く時も「早く早く」。言われるたびに、ぼくは「今やろうと思っただのに」と心の中でつぶやいて、わざとのろのろする。お母さんは「早く早く！」ともっと大きな声で言う。けさも超せかされて、学童に行く時カギを忘れてしまった。お母さんに何度も電話したけど出ない。しかたないからおむかえを待っていたら、最後の一人になってしまった。お母さんは記者の仕事をしていて、いつも忙しそう。家に帰っても、しかめっつらで新聞やニュースを見てパソコンをパチパチたたいている。お父さんが死んじゃってから、「早く早く」は二倍か三倍にふえた気がする。

ぼくが楽しみにしていた夏休みの沖縄旅行でもお母さんは「早く早く」を連発していた。行きたかった「アブリラガマ」に入る時も「早く早く」。おおぜいの日本兵や住民の命をすくった糸数ごう。ガイドのとう山さんはお母さんより二十才くらい上の女性だったけれど、かい中電灯片手にまっ暗なごうの中をぐんぐん進んでいく。お母さんは、とう山さんを質問ぜめにしている。ゆっくり聞きたいのに。はしょう風やのう症にかかったかん者がおくにねかされて、ごはんも水ももらえなかった話、ひめゆりの女学生がけん命にかんごした話、どれもすごかったけれど、ぼくが感動したのは日本兵の日比野さんの話だ。はしょう風にかかって死にかかっていた時、ぼく風でぐう然井戸のそばに吹きとばされた。そして、重しょうの仲間達の「水をくれ」という声にこたえて水を運んでいるうちに元気になって命が助かったという。とう山さんが「人のためにがんばっていると、神様が長生きさせてくれるんですね」と話していた。ごうを出ると、さとうきび畑の横でお母さんがとう山さんに言った。「じゃあ、とう山さんもきっと長生きされますね。」とう山さんはちょっとはずかしそうに、でもうれしそうに笑った。お母さんも笑った。つられてぼくも笑った。

お母さんはもうすぐウクライナに取材に行く。本物の戦場だ。お母さんは毎ばん本を読んでいる。昨日は「せんそうしない」という本だった。「こどもとこどもはせんそうしない けんかはするけれど せんそうしない」そうだよな。こどもは戦争しないのに、大人はどうしてするんだろう。お母さんはその答えを見つけに行くんだと言った。ぼくはすごく心配になって、お母さんの手にあごをのせた。お母さんはもう片方の手でぼくの頭をたくさんワシワシなでてくれた。あったかかった。お母さんの作るお弁当みただい。

もう少し大きくなったら、ぼくも答えを探しに行きたい。今度はぼくが「早く早く」ってせかすんだ。想ぞうしてニヤリと笑った。お母さんが「ニヤニヤしてないで早くねなさい！」っていつものしかめっつらになった。でもそんなお母さんがぼくは大好きだ。てれくさいけど、いつかこっそり伝えようと思う。